



2025年度 医学科入試結果総括

2025年度入試は新課程入試初年度であること、18歳人口が増加に転じたことなど、例年と異なる環境の変化があった。大学全体の動向として志願者数は増加、合格者数は減少となっており、厳しい入試となった大学もみられた。しかし、医学科だけでみると、国公立大（前期）では志願者数は減少、私立大では前年並みとなった。合格者は国私ともに前年並みにとどまっており、競争緩和といえる入試となった。

この記事では、2025年度医学科入試、および2026年度入試の変更点・トピックスについて詳しく解説する。

国公立大

志願者は前期日程・後期日程ともに減少、倍率もダウン

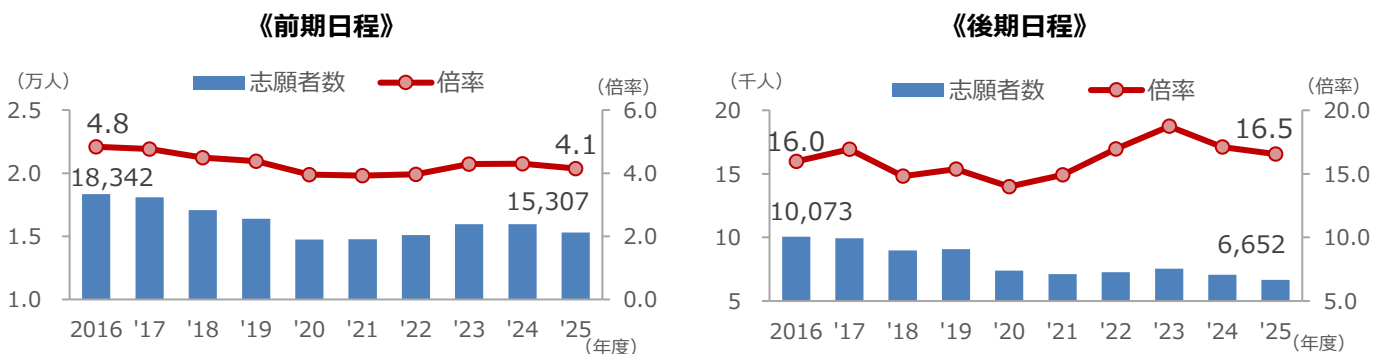
国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は15,307人（前年比96%）と減少した＜図表1＞。国立大、公立大に分けると、国立大で前年比98%となった一方、公立大では同82%と大きく減少した。福島県立医科大や大阪公立大で志願者が大きく減少したことで公立大全体の志願者減に大きく影響を及ぼした。志願者数が減少した一方、前期日程の合格者数は前年並みとなっており、倍率をみると前年の4.3倍から4.1倍へダウンした。＜図表2＞のグラフは、過去10年間の志願者数、倍率（志願者÷合格者、以降も同様に算出）の推移をみたものである。前期日程では近年、志願者の増加が続いていたが、今春入試では5年ぶりに減少した。今春は共通テストの平均点は上昇したこともあり、出願直前での他系統への流出は多くなかった。後期日程は今春入試も縮小の動きが続いていることなどから2年連続の志願者減となった。倍率もダウンしたが、募集人員が少ないことから、依然として厳しい入試である。

＜図表1＞ 国公立大医学科 一般選抜の入試結果

日程		志願者数（A）					合格者数（B）					倍率（A／B）		
		2023	2024	2025	24/23	25/24	2023	2024	2025	24/23	25/24	23年	24年	25年
前期日程		15,960	15,973	15,307	100%	96%	3,726	3,717	3,691	100%	99%	4.3	4.3	4.1
後期日程		7,550	7,063	6,652	94%	94%	403	413	402	102%	97%	18.7	17.1	16.5
国立	前期	13,552	13,733	13,473	101%	98%	3,154	3,143	3,124	100%	99%	4.3	4.4	4.3
	後期	6,553	6,168	5,671	94%	92%	342	352	339	103%	96%	19.2	17.5	16.7
公立	前期	2,408	2,240	1,834	93%	82%	572	574	567	100%	99%	4.2	3.9	3.2
	後期	997	895	981	90%	110%	61	61	63	100%	103%	16.3	14.7	15.6

※河合塾調べ

＜図表2＞ 国公立大医学科 一般選抜の志願者・倍率の推移



大学別の入試結果

次に大学別の入試結果をみていく。国公立大の志願動向は前年の志願者数増減や、入試科目・配点、2段階選抜の新規実施・倍率などの入試変更の影響を受けやすい。とくに大学よりも系統にこだわりが強い医学科では、こうした影響による志願者数の変動が顕著だ。

具体的な例を見ていこう。＜図表3＞は今春入試で志願者数の増加率・減少率が大きい大学を並べたものである。前期日程全体の志願者数は前年比96%と減少していたが、とくに減少が目立つのは**福島県立医科大**（前年比37%）、**三重大**（同42%）、**信州大**（同62%）、**山口大**（同63%）、**旭川医科大**（同65%）などである。河合塾「入試結果調査データ」でみると、**福島県立医科大**では地元（東北地区）以外の地区の受験生が減少していた。近年、同大では志願者数が1年おきに増加、減少を繰り返す隔年現象が続いており、今春は増加の年にあっていた。他地区の受験生を中心に警戒されたものとみる。**山口大**も**福島県立医科大**と同様の状況となっている。**三重大**や**信州大**は前年度入試で志願者が増加した影響で、**旭川医科大**は第1段階選抜の実施倍率変更（5.0倍→4.0倍）が影響し、それぞれ志願者が減少した。一方で志願者が増加した大学もみていくと、**富山大**（前年比253%）、**鳥取大**（同197%）、**徳島大**（同153%）、**宮崎大**（同153%）などがみられるが、これらは前年度入試で志願者が減少した大学で、とくに**富山大**の前年度入試は前年比53%と半減しており、その反動により今春は大幅な志願者増となった。来春出願を検討する際には、前年の志願者数、倍率のみで判断しないようにしたい。とくに今春入試で志願者が減少した大学は来春、志願者が集まる可能性が大きいと、注意が必要である。

このほか、今春入試で大きなトピックのあった大学の動向も確認しよう。**弘前大**では今春入試から前期日程の2次試験の総合問題を学科試験（英語・数学）に変更した。同大は前年度入試も志願者増となったが、今春も志願者数が前年比124%と増加が続いた。対策のしやすさから志願者が集まったものとみる。**名古屋大**では前期日程の2次試験で国語の出題を取りやめた。こちらも前年度志願者増となっていたが、今春も前年並みを維持した。このように、入試科目の変更は志願者の増減につながりやすい。

＜図表3＞国公立大 志願者数の増加率・減少率が大きい大学

①志願者数の減少率が大きい大学

大学	志願者数（A）					合格者数（B）					倍率（A／B）		
	2023	2024	2025	24/23	25/24	2023	2024	2025	24/23	25/24	23年	24年	25年
1 福島県立医科	594	519	192	87%	37%	83	78	72	94%	92%	7.2	6.7	2.7
2 三重	350	599	249	171%	42%	76	75	76	99%	101%	4.6	8.0	3.3
3 信州	380	446	276	117%	62%	100	91	92	91%	101%	3.8	4.9	3.0
4 山口	381	322	204	85%	63%	55	59	55	107%	93%	6.9	5.5	3.7
5 旭川医科	266	225	147	85%	65%	41	42	40	102%	95%	6.5	5.4	3.7
6 島根	649	487	344	75%	71%	64	71	67	111%	94%	10.1	6.9	5.1
7 大阪公立	249	275	196	110%	71%	80	80	80	100%	100%	3.1	3.4	2.5

②志願者数の増加率が大きい大学

大学	志願者数（A）					合格者数（B）					倍率（A／B）		
	2023	2024	2025	24/23	25/24	2023	2024	2025	24/23	25/24	23年	24年	25年
1 富山	421	222	562	53%	253%	74	75	71	101%	95%	5.7	3.0	7.9
2 鳥取	422	194	383	46%	197%	87	79	81	91%	103%	4.9	2.5	4.7
3 徳島	195	146	224	75%	153%	68	66	64	97%	97%	2.9	2.2	3.5
4 宮崎	282	250	382	89%	153%	47	48	51	102%	106%	6.0	5.2	7.5
5 鹿児島	331	294	440	89%	150%	70	71	71	101%	100%	4.7	4.1	6.2
6 滋賀医科	219	268	389	122%	145%	62	61	61	98%	100%	3.5	4.4	6.4
7 佐賀	230	187	238	81%	127%	51	54	54	106%	100%	4.5	3.5	4.4

※河合塾調べ

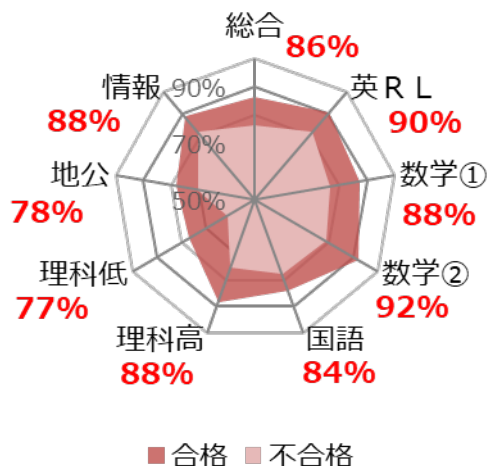
国公立大医学科合格に必要な学力

次に、国公立大医学科の合格に必要な学力をみておこう。

まず共通テストの成績について確認しておく。今春入試は新課程入試初年度を迎え、共通テストでは新教科「情報」の出題や一部教科・科目の出題範囲の変更などがみられた。＜図表4＞は、国公立大医学科受験者（前期日程）の共通テストの平均得点率を合格者・不合格者で切り分けてみたものである。グラフの外側の濃いチャートが合格者、内側の薄いチャートが不合格者の平均得点率を示す。合格者の平均得点率をみると、総合（6教科理系：英語・数学①②・国語・理科2・地公・情）の得点率は86%となった。共通テストの難易度は年度によって変わるが、医学科合格の目安として8割以上の得点率をめざすと良いだろう。教科ごとにみていくと、「英語」や「数学」など理系の主要科目では9割近い得点率となった。新教科「情報」は今春、平均点が高い教科であったが、医学科合格者も高い得点率となった。

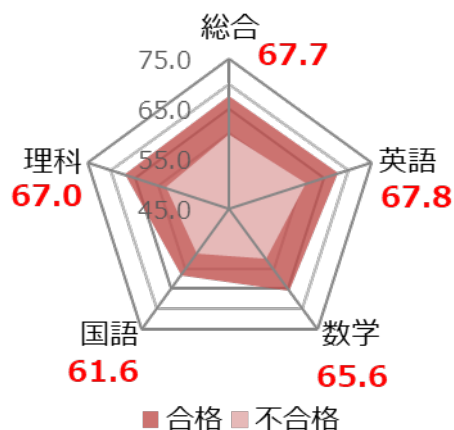
2次力についても確認しておく。＜図表5＞は、国公立大医学科受験者の平均偏差値を、合格者・不合格者で切り分けてみたものである。グラフの外側の濃いチャートが合格者、内側の薄いチャートが不合格者の平均偏差値を示す。合格者の平均偏差値をみると、総合（英・数・理から2～3教科）では67.7となっている。教科別にみても高い2次力が求められることがわかる。また、合格者と不合格者と比べると、数学、理科で差の開きが大きく、ここで差がついた様子がうかがえる。とくに理科は、国公立大医学科の多くが2科目を課するため、共通テスト同様、2科目めをいかに仕上げられるかが合格の鍵となりそうだ。

＜図表4＞ 国公立大医学科受験者の共通テストにおける
総合・各教科の平均得点率（前期日程）



※河合塾「入試結果調査データ」より
※得点率は共通テストリサーチの成績から算出

＜図表5＞ 国公立大医学科受験者の全統模試における
総合・各教科の平均偏差値



※河合塾「入試結果調査データ」より
※平均偏差値は全統記述模試（第2回・第3回）の成績から算出

2026年度入試のトピックス

最後に来春入試の変更点を確認していこう。まず、来春の一般選抜では**旭川医科大**、**山形大**、**佐賀大**で後期日程を廃止する。これにより周辺で後期日程を実施するのは、北海道・東北地区では**秋田大**、九州地区では**宮崎大**、**鹿児島大**、**琉球大**のみとなる。これらの大学では後期日程で志願者の集中する可能性がある。各大学の選抜方法は7月末までに公表される「入学者選抜要項」で明らかになるので最新情報はこちらで確認してほしい。

私立大

志願者は前年並み、一期入試は前年踏襲の入試環境

次に私立大入試の状況について確認する。私立大医学科全体の志願者数は105,846人（前年比100%）、合格者数は6,888人（同99%）とともに前年並みとなった＜図表6＞。方式別に分けると様相が異なり、一般方式では合格者数が減少したことで倍率がややアップしたが、共通テスト方式では志願者数の増加率以上に合格者数の増加率がアップしたことで倍率がダウンする形となった。また期別でみると、二期入試では志願者の増加が続いており、倍率もアップした。メイン入試である一期入試の倍率は前年並みに落ち着いており、今春は前年と同程度の入試環境だったといえるだろう。

＜図表6＞ 私立大医学科 一般選抜の入試結果

	志願者数（A）					合格者数（B）					倍率（A／B）		
	23年	24年	25年	24/23	25/24	23年	24年	25年	24/23	25/24	23年	24年	25年
全体	94,634	105,432	105,846	111%	100%	6,880	6,938	6,888	101%	99%	13.8	15.2	15.4
一般方式	80,187	90,467	90,575	113%	100%	5,984	5,958	5,868	100%	98%	13.4	15.2	15.4
共通テスト方式	14,447	14,965	15,271	104%	102%	896	980	1,020	109%	104%	16.1	15.3	15.0
一期	83,780	91,960	91,720	110%	100%	6,671	6,719	6,671	101%	99%	12.6	13.7	13.7
二期	10,854	13,472	14,126	124%	105%	209	219	217	105%	99%	51.9	61.5	65.1

※河合塾調べ

大学別の入試結果

大学別の入試結果を特徴がある大学を中心にみていく。**埼玉医科大**では志願者数が前年比137%と増加が目立った。なかでも一般入試前期では前年比165%と増加の中心となった。同方式の今春の1次試験日は、首都圏では**東邦大**と重なっていた。**東邦大**の志願者数は一般入試で前年比74%と減少しており、今春は**埼玉医科大**に多くの志願者が集まったものとみる。このほか、**福岡大**や名称変更した**昭和医科大**で志願者が増加した。一方、志願者数が減少した大学をみると、先ほどの**東邦大**のほか、**杏林大**、**東北医科薬科大**など5大学で志願者が1割以上減少した。多くの大学は前年度入試で志願者が増加しており、国公立大同様、前年の志願者数、倍率のみで判断しないようにしたい。

次にトピックのあった大学の状況を確認する。**獨協医科大**では今春入試より、共通テスト方式を廃止し、一般入試後期の募集人員を増員した。加えて、1次試験の会場も栃木会場から東京会場に変更したこともあり、同方式の志願者数は前年比120%と増加、大学全体でも志願者は前年並みにとどまった。一方、共通テスト方式を新設した**聖マリアンナ医科大**では、募集人員5名の同方式に519人の志願者が集まった。倍率（志願者÷合格者）は103.8倍と飛びぬけて高い倍率となり、かなりの狭き門だったといえる。共通テスト方式で教科「情報」を唯一必須にした**藤田医科大**では同方式の志願者数が前年比103%と増加、負担増の影響はみられなかった。主に国公立大志願者の併願先として志願されたものとみる。

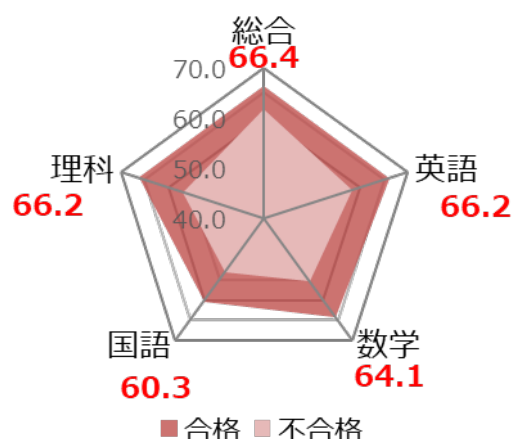
来春も一部の大学で入試変更・トピックがみられる。とくに受験生に有利となる入試変更などは志願者から注目を集めやすく、厳しい入試となることもあるため注意したい。

私立大医学科合格に必要な学力

＜図表7＞は私立大医学科受験者の平均偏差値を、合格者・不合格者で切り分けてみたものである。グラフの外側の濃いチャートが合格者、内側の薄いチャートが不合格者の平均偏差値を示す。合格者の教科別の平均偏差値

をみると、科目間の偏りはほとんど見られず、バランスよく高い学力が求められることが分かる。合格者と不合格者で最も差がついた科目は私立大でも理科であり、9.3ポイントの開きが生じている。

＜図表7＞私立大医学科受験者の全統模試における
総合・各教科の平均偏差値



※河合塾「入試結果調査データ」より
※平均偏差値は全統記述模試（第2回・第3回）の成績から算出

2026年度入試のトピックス

私立大では1次試験の試験日を遅らせる大学が増える。文部科学省の大学入試におけるルールブック（大学入学者選抜実施要項）では、これまでも教科・科目に係る選抜については原則2月1日以降と定められていたが、一部で2月1日より前に試験を行っていた大学もあった。昨年末に改めて各大学に試験期日を遵守するよう通知されたこともあり、来春入試では、これまで1月に試験を行っていた大学が2月以降に試験日を変更する動きがみられる。医学科では、現時点で、**獨協医科大**、**北里大**、**杏林大**、**金沢医科大**、**川崎医科大**が1次試験日を2月以降に変更する。これにより大学同士の試験日が重なるケースが例年以上に増えるとみられ、受験スケジュールを丁寧に組む必要がある。

試験日以外の変更点・トピックをみると、**自治医科大**が富山県出身者を対象とした学校推薦型選抜および、富山県、山梨県、山口県、佐賀県の4県出身者を対象とした総合型選抜を新たに実施する。同大だけでなく、**昭和医科大**では公募制の学校推薦型選抜、**兵庫医科大**では総合型選抜（エキスパート養成）を新規実施するなど、来春も総合型・学校推薦型選抜の拡大が続く。**北里大**では共通テスト方式を新設する。後期日程として実施されるが、他大の後期（二期）入試は募集人員が少ないため高倍率となるケースが多く、同大でも厳しい入試が予想される。なお、方式の新設に伴い、一般入試前期の募集人員が10名減となるため、こちらも注意したい。入試以外では**藤田医科大**が来春入学者より6年間の学費が約30%引き下げとなる。直近では、2023年度に**大阪医科薬科大**が学費の値下げを発表、初年度の入試では志願者が大きく増加した。同大についても値下げに加え、今春入試で大学全体の志願者数が減少したこともあり、志願者の集中が見込まれる。

以上、2025年度医学科入試の状況をお伝えした。来春の18歳人口は今春並みに落ち着く。加えてこの春の河合塾実施の模試では医学科の志望者は概ね前年並みとなっており、医学科志望者でみても来春は難化要素は見当たらない。しかし、依然として医学科入試は狭き門であり、入念な受験準備が必要だ。最後まで粘り強く戦う体力・精神力も必要となってくる。

また、来春入試は新課程2年目の入試となる。共通テスト「情報」をはじめ、出題範囲・傾向が変わった教科の出題状況もみえてきた。国公立大志望者を中心に対策を立てやすくなっていることだろう。環境が向かい風でない今、努力が報われやすくなっている。目の前にある課題をひとつずつクリアしていき、医学科合格にむかって努力を続けてほしい。